

注射を受け、一週間滞留した。釜山はコレラが流行しているために、乗船港は仁川になったという。仁川では七千五百トンのリバティー船に、定員二千五百人のところを四千五百人も詰め込まれたので、甲板の上まで足の踏み場もなかった。

昭和二十一年六月十七日、三歳のときに渡鮮して、十二年間を過ごした朝鮮に別れを告げた。暮れなずむ朝鮮の山々を眺めながら「必ず骨を拾いに帰って来るぞ!」と、再び心に固く誓った。船上では、並木路子の「リンゴの唄」と、田畑義夫の「かえり船」が繰り返しスピーカーで流されていた。

博多港には三十隻近くの引揚船が停泊していた。検便の結果、異常なしということで上陸許可が下りたのは、六月二十三日のことだった。咸興を出て一カ月、會寧を避難・脱出して十カ月と十日目のことだった。埠頭には、大邸から復員した長兄と博多にいた兄が出迎えていたが、「連絡では赤尾緑以下五人となっていたから、親父が死ん

だと分かったが、あと一人は誰だ」と、長兄はいきなり尋ねた。

博多港で、白いDDTを頭からかけられ、私たちは避難民から引揚者に変身した。

生き抜いて、今!

東京都 中村 登美枝

#### 一 ソ連軍侵攻

昭和二十(一九四五)年八月九日、朝鮮咸鏡北道の慶興郵便局に勤務していた私(旧姓香川)は、同僚三十人と共に深夜の一時に局に集結を命ぜられた。当時十九歳だった。その日、突如として対日戦争を布告したソ連軍は満州を一举に南下してその先頭はもう、ここ慶興の目前にまで迫っていた。

鮮満国境を流れる豆満江の対岸にある関東軍の陣地が、赤々と燃えていて遠雷のように響く砲撃

音が、地鳴りと共にずしりと体にも感じられるようになってきた。だが、真つ暗闇の中の慶興の町は、異様に静まり返っている。私も一応は、心の準備と、いざというときの覚悟はできているつもりだったが、いよいよとなると、緊張と不安で胴震いがしてきて止まらなかつた。

「慶興橋駐在所！ 応答せよ。慶興橋……！」と、無線室から流れてくる大声が聞こえてきて、急に切迫感を増した。豆満江に架かる慶興橋は、慶興守備隊の最前線で、その袂にある駐在所は、諸連絡のための重要拠点であった。雷のごとき威圧音を発しながら、砲弾の炸裂音がだんだんと間近に迫ってきた。その音と交差しながら、駐在所からの報告が入ってきた。「ソ連軍と交戦中」という声が続いて、「石丸巡查戦死！」という悲痛な知らせが聞こえたが、それを最後にぼったりと無線も、電話も途絶えてしまった。

私たちも事態の切迫に、局の非常持出品を防空壕に運び入れた。

朝五時、慶興在留日本人に避難命令が発せられ、母と、十一歳の国民学校生の弟は、用意されたトラックに乗り慶興を脱出した。父は、朝鮮人造石油株式会社の上三峰出張所に勤務していたので不在だった。

夜が明け始めると同時に、町中への砲撃が開始され、地響きを発しながら砲弾が炸裂した市街は、たちまちに火の海となった。私たちにも避難命令が出たので、私は大事な物を家に置いてあることに気付き、危険を承知で走って五分という我が家に向かった。

家の中に土足のままで飛び込み、仏壇に置いてある過去帳と、本箱に飾ってあった彼の写真を素早く取ると、廊下から裏庭に飛び降りた。彼とは、私の初恋の人で、慶興憲兵分隊の兵士であった。

地面が揺れていたが、局までの上り坂を走った。辺り一面に砂塵が舞い上がっていて、目が痛く耳の奥がキーンと鳴っていたが、無我夢中で局

に飛び込むと途端に、「防空壕に退避！」という、浜本主任の叫び声が聞こえ、主任のあとについて防空壕に入ろうとしたときに、局舎に砲弾が撃ち込まれた。激しい震動と降り注ぐ土砂！局舎から飛び出してきた久保田局長の悲愴な声が響いた。

「西峰台の裏山に避難せよ！」との指示で、局のみんなは、西峰台を目指して走った。私も続いて走ったが、坂道で遅れてしまった。砲弾の炸裂する轟音が私を追うかのように迫ってくる。道には瓦礫が散乱していて思うように走れない。はうようにして溝の中に身を沈め、そして砲撃でできた穴へと移った。

周囲には人の姿も見えなくなり、恐怖と、不安で体は小刻みに震えていた。穴から出ようとしたときに、再び大音響と共に強烈な爆風が私を襲った。それからのことは覚えていない。私の小さな体は、吹き飛ばされてしまったらしい。「香川さん、香川さん！ しっかりしろ！ もう慶興は全

滅だよ」という男の人の声で気が付いた。その人は局の集配の人だった。その人は声を掛けながら行ってしまった。私は起き上がることもできずに、先を急ぐその人の後ろ姿をぼんやりと見つめていたが、そのときに初めて小川の中に倒れているのに気付いた。上衣も、もんべもずたずたで、膝から流れている血を見て驚いた。防空頭巾も、救急袋もなくなっていた。そんな中で、「あっ！」と思い出して胸に手を当て、胸の中にしまっていた物を確かめたが、ちゃんとあったのでほっとした。

ここには危ないと思い、気力を奮い立たせて西峰台に向かった。足も、体も血と泥で固まり、傍目には泥人形のようなだった。やっとの思いで西峰台の裏山にたどり着いたが、そこには人影が見当たらなかった。私は、呆然となりその場へへたりこんでしまった。灰色のようになって空には、太陽が私の真上にあった。

## 二 父たちとの再会

八月十日、生まれて初めての野宿で、前日の出来事が悪夢のように思い出された。取りあえずは、父のいる上三峰を指すほかないと考えた。前日、下汝坪の駐在所で手当てをしてもらった膝の傷が痛むが、そんなことは言っておられずに避難民の列に加わって歩いた。

途中、小学校の校庭に整列している兵士の中に、懐かしい彼を見付けた。彼も私に気付き、「おなががすいたろう」と、大きな握り飯を持って来てくれた。「有り難う！」と小さな声でひと言礼を言う。考えれば八日の夜から何も食べていないことに気付き、急に空腹を感じた。おいしかったし、やっと元気が出てきた。そのとき、「おおい！ 登美ちゃんのお父さんだよ！」という声がある。声の方を見ると、「登美枝！ よく無事だったなあ」といって近づいて来る父の、日焼けした顔が嬉しそうだ。私も思わず父に抱きついて泣いてしまった。娘の安否を氣遣って、

上三峰から捜し来てくれた父の気持ちを有り難く思った。

その夜、父に大事な過去帳を渡し、慶興脱出の様子を話した。身の危険にさらされながら、それをかい潜ってきた娘の勇氣に、「登美枝はえらいよ！」と、父は笑って褒めてくれた。

## 三 「登美ちゃんを頼みます！」

八月十一日、今日も避難民の列が延々と続いていた。上三峰方面と、会寧方面との別れ道で、彼は私たちを待ち受けていた。父の前に立った彼は「登美ちゃんを頼みます！」と言って敬礼した。次いで私に向かって、「どんなことがあっても、生きて内地に帰れよ！」と強く言って私の手を握った。彼に手を握られるのは初めてで、思わず父の顔を見て、次いですぐに彼の顔を見直し、何か今までにはない重大な気持ちを感じた。彼は、父にも握手をすると、もう後ろも振り返らずに、会寧に向かう隊列の中に姿を消した。

彼を見送った父と私は、言葉もなく歩き上三峰

の社宅に向かった。母と、弟が夕食の支度をして待っていて、久しぶりに親子四人の食事となったが、私の話で持ちきりだった。

八月十二日、仕事がある父を残して三人は上三峰駅から列車に乗り、行けるところまで行って、そこで父を待つこととなった。駅は大勢の避難民でごった返していたが、やっと一両の貨車に潜り込むことができた。そこには既に満州から来たという現地召集の兵隊が乗っていた。満州方面の戦況を聞くと、何も知らないと言ったまま、押し黙ってしまった。夕方近くになって、列車は延社に着きこころまでと言われて、乗っていた者は全員降ろされた。致し方なく避難民はそれぞれに野宿の場所を求めて林の中に散って行った。山頂に近い駅は肌寒く、このまま野宿をすることは耐え難く、駅長に頼んで宿を探してもらったら、幸いに見付かりそこに行った。先客は以前から親しくしていた慶興警察署関係の人たちで、思い掛けない出会いに、母も私もほっとひと安心し、部屋の片

隅でくつろいだ。そこに、慶興橋駐在所で戦死した石丸巡査の夫人が寄って来て「主人がまだ来ないのよ」と泣き出しそうな顔をして話すので、私は答える言葉もなかった。

八月十三日、警察関係の人たちは朝早く出発した。私は、「石丸夫人にかわいい赤ちゃんが無事に生まれますように」と心の中で祈りながら見送った。私たちは父が来るのを駅で待っていた。翌日、延社に着いた軍用列車の中に彼の姿を見付けたが、別れ道で見送って以来で、私の胸は嬉しさでいっぱいだった。

列車から降りてきた彼は少し疲れているような様子だった。周りに誰もいなければ彼の胸に飛び込みたい気持ちでいっぱいだったが、それはできなかった。「ここで一週間待つように」という父の伝言を残して、彼は再び列車に戻った。動き出した軍用列車のステップに足をかけて、こつちを振り返った彼の寂しそうな横顔が、いつまでも、いつまでも私の中から消えなかった。

#### 四 逃避行の開始

八月二十一日、「香川でーす!」と、聞き慣れた父の声に、飛び出した。一週間は長かったが、やっと父の顔を見た。その顔は、真っ黒に日焼けし、無精ひげが伸びていて、歩き続けてきた疲労がありありと見受けられた。誰もいない広間で横になった父は、昏々と眠り続けた。

八月二十二日の早朝、「さあ行くぞ!」という父の掛け声で延社を出発した。白岩までは列車に乗れたが、無蓋車に詰め込まれた。白岩駅前は、避難民と、日本兵で埋め尽くされていた。「敗戦だって……」、「終戦だよ……」などと叫ぶ人々の声に驚かされた。「日本軍が武装解除された」と聞いて、父も、母も、顔色を失ってしまった。日本が負けるなどということは、信じられなかった。八月十五日に終戦になったと知ったが、「生きて内地に帰れよ!」と言った彼の言葉の真意が、やっと理解できた。

敗戦の知らせに、泣き出す人、座り込んで呆然

自失となった人、大声でわめく人、様々な人々で悲壮な空気が駅前には漂っていた。私たちにも一人ずつ、自決用の手榴弾が渡されたが、ずしりとくるその重さに手が震えて止まらなかった。

その夜、林の中で自決する人の爆発音が、何度となく闇夜に響いた。駅構内のはずれでは、轟音と共に巨大な火柱が上がった。仕掛けた爆薬で、貨車が吹っ飛んだ。兵隊さんの集団自決だった。だが父は、私たちに「絶対に無駄死にはするな」と言って、渡された手榴弾を林の中に捨てさせた。

八月二十三日、前夜の生き地獄のごとき衝撃が、人々の心を狂わせて生き抜く気力を奪ってしまったのか、線路を歩く人の足取りは重く、ただ黙々と歩いている。負傷して線路端にうずくまり、自分の傷口にわいた蛆虫を食べている人もいたが、私たちはその傍らを目を背けながら通り過ぎた。

小さな集落を通ったら、そこで保安隊による所

持品検査があった。初めてのことで不安な避難民は列をつくり、順番がくるまで道路に座らされて待った。やっと順番になると、男性は裸にされて、後ろ手に座った。

父も裸になり手を出して調べられて、持っていた腕時計、指輪、万年筆などをすべて取り上げられ、父が腹に巻いていたお金も奪われてしまった。

身分調査も厳しく行われて、元警察官、元役人などの人々は、し烈な仕打ちを受け、体罰による悲鳴は、遠くまで聞こえていた。

赤ちゃんのおむつの中から、郵便貯金通帳が発見され、そこから身分が露見した四人家族の一家がいたが、家族全員裏庭に連行されて、すぐに銃声が響いた。火が点いたように泣いていた赤ちゃんの泣き声が、ぴたりと止んだ。あまりのむごさに私たちは声をのんだ。地面にうつぶして号泣する人もいた。

何の抵抗もできず、何の抗議もできない敗戦国

民の惨めさを、いやというほどに知らされた。

## 五 髪を切る

ソ連兵のことは、以前から誰言うともなく、「露助！」と呼んでいたが、その露助による略奪、暴行などの行為は目を追って目にあまるものになってきた。年ごろの娘の身を案じた父は、私の髪を切ると言い出した。女性にとっては大事な黒髪だからと、母は二言、三言父に抗弁していたが、結局は父の言うとおりになり、小さな爪切り、鋏が父に渡された。父は私を川原に連れて行き、「ここに座れ。髪を切ってやる」と言った。父の顔がいつになく険しく、私が石の上に座ると、川の水で髪を濡らし、じゃきじゃきと切り始めた。父は、母の手に切った髪を渡すと、母は砂地を掘って丁寧に埋めていた。私も涙が潤んできた。頭がなんとなく軽くなったが、地肌を感じる父の手の温もりに、恨みがましい気持ち徐々に消えていった。「疲れたか？」と声を掛けてくれた父の顔は、いつもの優しさに戻っていた。川の水で

手を洗う父と並んで私も顔を洗った。感謝の気持ち少しづつわいてきた。さっぱりとした坊主頭にこの次いでとばかりに、顔にもなべ墨を塗りたくり、弟に見せた。「どう！ この頭と、顔」というと弟は、「恐い、恐い」と言つて少し寂しそうに笑つていた。

翌朝早く、髪を埋めた川原に行き、肌身離さず持つていた彼の写真を取り出し、その凜々しい軍服姿に向かつて思はず頬ずりをした。両親からも交際を許され、式を挙げるまでになつていた慶興での日々だったのだ。私は、彼の写真を二つにちぎり、体の方を髪を埋めた所に一緒にし、顔の部分の口の中に入れて飲み込んだ。彼はもう私と共にいる。どんなことにも耐えていける。飲み込みながら、「どうか私を守つて下さい。そして、あなたもどうかご無事で、内地にお帰り下さい」と祈つた。

埋めた所には、人に踏まれないようにと、小石を並べ、付近に咲いていた野花を取つてきて飾つ

た。

## 六 絶体絶命

城津に向かい、さらに威興へと疲れ切つた体で歩き続けた。ソ連兵の蛮行は止まることなく、昼、日中でも凌辱される女性が数多くいた。被害者が首吊り自殺した現場を見るたびに、憤りと悲慘さに体が震えた。日が暮れかかったところにやっと、興南にたどり着いた。両足にまめをこしらえて、疲れ切つていた母を少しでも早く休ませたいと思つた。収容されたお寺の廊下に、私たち四人は崩れるようにして横になった。雨、露がしのげ、電灯のつく建物の中で眠ることができるだけ天国である。

興南で避難生活をしていたある日の午後、両親と弟は買い物に出かけ、私一人で留守番をしていたとき、ふと何かの気配を感じた。そこには、廊下の窓から部屋をのぞき込んでいるソ連兵の顔があった。私は、前後の見境もなく立ち上がり、「露助が来た！ 誰か早く鐘を叩いて！」と、廊

下を走りながら叫んだ。ちらっと後ろを振り返ると、露助は廊下側の窓から飛び入っていた。手には拳銃を持っている。本堂まで走ると、そこには中央に一人の老人が座っていた。私は必死になってその老人にしがみついて、「助けて下さい！」と言いながら老人のあぐらの中に上半身を突っ込み顔を伏せ、両手でしっかりと老人の膝をつかんでいた。

露助は、二人で組んでいて、一人は見張りに立つのか玄関に向かい、一人はこちらに近づいて来る。「おれだって命が惜しいよ！」と、老人はぼつりと言った。私の右肩に拳銃が突きつけられて、体が震えて冷や汗が流れ出した。絶対絶命のピンチに、私は覚悟した。「撃つなら撃て！ いざとなったら舌を噛み切つて死のう！」と思つたら、何も恐れるものはない。静まり返つた本堂の中は、蒸し風呂のように暑く、脇腹を流れる汗が分かつた。そのとき、耳の底に彼の声がよみ返つていた。「生きて内地に帰れよ！」というあの言

葉だ。そうだ彼との約束だ。私は死んではいけないのだ。不気味な沈黙が続いたが、それはほんの数秒だつたと思う。

「この手を放して下さい」という老人の小さな声が耳元で聞こえた。でも今この手は放せないと思うと、一層力が加わつて膝をつかんだ。動悸が激しく鳴り、のどはからからに渴き、息苦しさも限界となつたときに、「かん、かん、かん」という非常事態を報じる鐘の音が寺中に響き渡つた。「ああ！ 鳴つた、鳴つた」と思わずつばを飲み込んだ。「ドタ、ドタ」と慌てて逃げ出すソ連兵の気配が消えてから、やっと私は老人のあぐらの中から顔を上げた。

隠れていた人たちも出てきて駆け寄つてきた。私は、「ありがとうございます」と老人に頭を下げた。そのとき外出から戻つてきた両親と弟が、本堂に飛び込んで来た。父は私の顔を見るなり、崩れるようにして座り込んだ。母と、弟は私に抱きつき泣き出した。老人こそ生きた心地では

なかっただろうと私は思い、申し訳なきに心が痛んだ。私たちの命の恩人に、いくばくかの謝礼を差し上げて、心から親子四人は深々と頭を下げた。

## 七 母と、父の死

この出来事があってから父は、ソ連兵のいない田舎に行こうと言いつ出した。住み込みで農作業を手伝いながら、転々と移り歩いたが、秋が深まってくるとその農作業も無くなり、十一月の末には、とうとう興南の、日室会社暁星寮に収容されることとなった。寮では六畳一室に、十二人が押し込められた。露助の乱入に備えて、女性は天井裏で寝起きをするように指示されて、窓ガラスの無い窓に筵むしろをぶら下げたが、雪は容赦なく吹き込んできた。

逃避行に続いての慣れない農作業の連続で、両親の体力はめっきり減退していた。特に母の体力はもう限界にきていた。ある日のこと、疲れたと言つて横になった母の体温が、異常に高いことに

気が付いた。「発疹チフス」であった。医者もいないし、薬もない。死を待つほかに手だてのないことを知った。

寮では連日のように死者が出る。遺体は筵むしろに包み、廊下に並べられる。栄養失調のうえに発疹チフスが蔓延し、私たちの同室者は半数に減った。父も弟も寝込み、私一人で看病を続けたが、寒さは厳しさを増し、母の容態は悪くなる一方であった。雪で頭を冷やす他には、何の手だてもないのが悲しかった。

十二月二日の明け方、母が私を呼んでいるのに気付いて、天井裏から降りた。寝ている母の額の生えぎわから、黒ゴマのような風がはい出し、目から鼻へと動いている。父の顔を見ると、黙って首を横に振っていて、目には涙が光っていた。

「登美ちゃん早く！ 船が出てしまふよ！」と指を動かしている母に、「帰ろうね……内地に」と声を掛けると、安心したように目を閉じた。優しい死に顔であった。

昭和二十年十二月二日、香川クニミは享年四十六歳の人生を終えた。

私は父の手をとり、そっと母の手を握らせた。

彼との結婚を楽しみにしていて、何かと心づかいをしてくれた母には、とうとう私の花嫁姿を見せられなくなった。そのことを悔いながら、私たちは興南の三角山に母を埋葬した。

母の死後、父の食欲はすっかり落ち、好きな餅すら口にしなくなった。「何か食べないと、体力が続かないよ!」と言っても、静かに微笑むだけである。

十二月二十一日、珍しく父が、ゆで卵を食べたいと言う。物売りの小母さんに、持って来てくれるように頼むと、父は子供のような笑顔をつくった。腹巻きの中から取り出した紙幣を、私の手に渡してくれたながら、「俊雄を内地に連れて帰れよ!」と言うと、ゆで卵が届く前に、静かに息を引き取った。意識は最後までしっかりしていた。覚悟はできていたが、顎ひげの伸びた父の顔に見

入っていると、涙があふれてきた。

昭和二十年十二月二十一日、香川新太郎、享年五十三歳、母のあとを追うようにして死んだ。

発熱でふらつく私は、父の埋葬に行かれず、使役の人に頼んで、母と同じく三角山に葬ってもらうことにした。「私がついて行けなくて、ごめんなさい」と祈りながら見送った。

弟と二人きりになった部屋は、凍えるような寒さだった。窓の筵が風に揺れてめくられると、山のような積もった雪が見える。春になってこの雪が解いたら……父の遺言と彼の言葉を守って、何とんでも内地に帰るのだ、と心に誓った。

#### 八 孤児との生活

明けて昭和二十一年も正月を過ぎると、少しずつ体調が戻ってきた。いつまでも泣いてばかりいられない。弟と二人で、希望を持って生きていこう。ある日、暁星寮の団長から、「同じような境遇の孤児がいる。面倒を見てくれないか」と頼まれた。幼い子供たちの顔を見ているうちに、親代

わりはできないけれど、姉としてなら力になってあげようという気持ちで固まった。

六畳一室に総勢十三人の生活が始まった。預かった孤児十一人は、五組の姉弟の集まりで、女子六人、男子四人、小学生がほとんどで、最年少は三歳の女の子だった。

毎日の食事は配給の油かすで、たまに干魚も支給されたが、次の配給がいつになるかは分からない。一度、珍しくも米の配給があった。男の子たちが拾ってくるソ連兵の残飯にたっぷり水を加えて大鍋で煮る。ほとんど味もない残飯汁だったが、私たちには体の温まる最高のご馳走であった。子供たちは何ひとつ不平を言わないし、親の話もせず、いじらしいほどで、私たち姉弟は逆に力付けられたものだった。

子供たちが私を守ってくれたこともある。ある日の午後、露助が寮に侵入して来たが男の子たちがさっと私を布団にくるみ、その上に乗って隠してくれた。「マダム・ダワイ！」と大声をあげ

ながら戸口に現れた露助に「ダワイ！ダワイ！」とわめき立て、みんなが手を差し出すと、露助は子供たちの騒ぎっぷりに驚き、食べかけの黒パンを投げてよこし、退散してしまった。男の子の機転とたくましさは、心強く感じた。

知らず知らずのうちに、皆の結束力が強くなっているのを感じるにつけ、この子供たちを絶対に内地に連れて帰ろう、と私は固く心に決めた。

三月のある朝、隣の団長室へ朝の挨拶に行く時、部屋は空っぽで、「先に行きます」というメモと、一斗の米袋が残されていた。信頼していた団長からも見捨てられた、という思いで心はいっぱいになってしまった。年長の幸ちゃん、直ちゃんを中心に皆で相談したが、この米がなくならないうちに、全員、歩いてでも南に向かって行くという決意が固まった。「よーし！ 出発」と三十八度線をめざした。

## 九 いざ出発！

春の三月といっても、まだ足を取られるほどの

雪が残っている。悲しい思い出の暁星寮をあとに、駅に向かう。南下する列車を待つ人たちがあふれ、殺気立った雰囲気だ。駅員を探していると、「じゃまだ！ どけーっ！」と怒声が飛んできた。首をすくめている子供たちに「大丈夫、お姉ちゃんのあとについて来て」と声を掛け、先導する。迷子にならないように気を配るのに精いっぱいだ。半日ほど待って、やっと貨物列車に全員乗ることができ、ホッとひと安心。走り出した列車は何度となく、停止と発車を繰り返す。幾時間走ったのだろうか、山間の駅で降ろされた。冷気が体にしみ込み、思わず身震いをしてしまった。ここから先は、歩いて三十八度線をめざすのだと聞かされた。さっそく林道を歩き始める人もいたが、私たちは野宿することにした。

谷川の水で薄い白粥を作る。体が温まった子供たちは、ひよこのように身を寄せ合って眠り始めた。寮にいたとき、夜中に必ず、「お姉ちゃん、おしっこ」と私を呼んでいた最年少のみどりちゃんも、今夜は一人でできた。もう大丈夫である。翌朝早く、全員で歩き出す。大人たちの後ろについて歩いていると、「うるさい、離れろ！」と怒鳴られた。「騒ぐと、露助たちに見付かるじゃないか！」と唾を吐き掛けてくる人や、足をける大人など、自分のことだけで精いっぱいという情けない大人たち！ 悔しさと怒りが込み上げてくるが、私は子供たちを励ましながら、大人不信の自分の心と闘いながら、集団とは間をあけて歩くようにした。山道を歩き……、線路に戻り……、畑の畦道に入り……、私の後ろを子供たちは懸命について来る。全員しだいに疲れてきて、小休止も多くなる。線路脇に倒れている老婆から、「この子を頼む」と言われ、四歳くらいの子を預かった。名前を聞くと、「マーちゃんよ」とだけ言って、うつむいてしまう。みどりちゃんと交互に、わたしの背中で眠らせることになった。私たちの集団に、一人、二人と見知らぬ子供が加わるようになった。親にはぐれたのか、捨て

られたのかのどちらかだが、「ついて歩けるのなら、一緒に行こう」と仲間にするが、手持ちの米が心配になってきた。

ここまでは一人の病人も出さずに来たのだが、ある日、みどりちゃんが発熱した。途方にくれているとき、病人の面倒を見てくれる集団があるという。私はみどりちゃんと、その兄の直ちゃんをその集団に預けることにした。取り返しのつかないことになるよりはという苦渋の決断だった。無事に内地に帰れますようにと、祈りながら別れた。

三十八度線が近づくにつれ、ソ連軍の警備が厳重になっていると聞かされた。捕まると送り戻されるという。昼間は林の中やトウモロコシ畑に隠れ、夜になって歩くことが多くなった。月や星のほのかな明かりだけが頼りだった。

最後の難関は、夜の川渡りだった。水音を頼りに土手を下ると川が見えた。川幅は五、六メートルで、電柱を横倒しにした丸木橋が架かっ

る。声を立ててはいけないと全員に注意する。四つん這いになって一人で渡れる子を先に行かせ、あとは、私が川の中に入り、手を握って支えながら一人ずつ渡らせる。流れが速く、滑り落ちて流されたらもう助からない。暗くて表情は分からないが、握る手に真剣さが伝わってくる。川の水は冷たく、腰から下は感覚を失ってしまった。全員渡り終えたのを確認し、最後に私自身が向こう岸に這い上がるのを、小さな幾本もの手が引っぱってくれた。全員二十三人……無事に川を渡った。このときの喜びはひとしおのものがあつた。子供たちの団結力には、私は涙がこぼれた。トウモロコシ畑に身を隠して、冷え切った体を寄せ合って眠ってしまった。

朝早く、畑仕事にきた老人に見付かってしまった。「しまった！」と思ったが、片言交じりの朝鮮語で、「アボジーオモニー、シンダンジ」（父も母も死にました）と言うと、分かったという顔で、自分について来いと先導して歩き出した。連

れて行かれた先は、保安隊の詰所だった。「まずい！」と不安がよぎったが、私たちのことを保安隊員に話している老人のその真剣な顔を見た私は、きっとこの老人は私たちを助けてくれると思った。「持ち物を全部出せ」と命じられて鍋、やかん、次いでに鉄かぶとも出すと、ぽんと蹴られてしまった。おびえた子供たちは、身を固くしていた。

鉄かぶとに対しては、消しがたい憎しみがあるのを感じた。全員興南から歩いて来た孤児だと話す、保安隊員は驚きの表情を浮かべて、「子供の足で、よくここまで来たね？」と日本語で言った。日本人の誰からも掛けられたことのない、このいたわりの言葉に嬉しくなって「ありがとう！」と言って老人と保安隊に頭を下げた。

#### 十 三十八度線を越える

静かに遮断機が上がる。子供たちの喚声！

待ちきれずに、下をくぐっていつせいに走り出した。私が最後に三十八度線を越えた。川原で

待っていた子供たちと一人ずつ握手を交わし、抱き合って泣いた。子供たちの顔も、涙でクシャクシャである。興南の寮を出発して三カ月、子供たちを連れてどうとうここまでたどり着いた。

私は北方に向かって叫んだ。「お父さん、お母さん、見ていますか！ 私たちは、三十八度線を越えましたよ！」。そして、内地に帰りたくて死の際まで願っていた両親に、「きつと迎えに来るから、待っていてね」と約束した。

私たちは泣きはらした顔を川の水で洗って、用意されたトラックに乗せられて収容所に着くと、全員DDTを頭から振りかけられた。子供たちは真っ白になったお互いの顔を見て、キヤッキヤッと冷やかし合っている。久しぶりに聞く子供らしい遠慮のない笑い声に、私の気持ちまでパッと明るくなってしまった。

夕食はパンとスープと豆だったが、一心不乱に食べる子供たちの満足そうな顔。その夜、私は子供たちの寝姿に見入ってしまった。どの子も、ま

るで天使のように、天国の夜具にくるまっているかのように、熟睡していた。「よく頑張ったね。ありがとう！」と、心の中で、そうつぶやいた。天国に眠る両親に「私たちを守ってくれてありがとう」と声を出して言うと、涙がこぼれてしまった。

翌朝、列車に乗せられて京城（ソウル）へ向かって出発したが、客車も座席も久しぶりである。子供たちは元気いっぱい、おびえた目の子はいなくなった。マーちゃんはいつものように私の傍を離れない。車窓から入るさわやかな風にしみじみと初夏を感じた。列車が京城に着くと、賑やかだった車内が一瞬静かになった。プラットホームを駆けてくる白衣の男性が叫んでいる「孤児はいませんかー！」私は窓から身を乗り出して、「ここにおりますよ！」と手を振った。そのとき、「あっ、お父さんだぁ！ お父さんだ」と、隣の席の和子ちゃん姉妹が大声を出した。車内に入って来た父親は、二人の娘を抱きしめた。思い

掛けない父子の対面に車内から拍手が起こった。私も感動して泣いてしまった。和子ちゃん姉妹の母親は暁星寮で亡くなったが、現地召集で軍医だった父親は、引揚者の支援活動をしながら、娘たちとの再会を待っていたのだという。こんなに嬉しいことはないと言う父親に、無事に姉妹を引き渡すことができた。私は、たとえようのない満足にひたっていた。

和子ちゃんのお父さんには、全員着替えの衣服のお世話になった。釜山の寺で一週間の休養もとらせてもらい、子供たちはすっかり元気を取り戻した。

#### 十一 祖国へ

引揚者支援業務に残る和子ちゃん親子に見送られて、私たちは釜山を出港した。他の孤児集団と合流して、船の上の甲板の一室に入れられて、全員で内地へ向かった。朝鮮との別れである。異国の地に埋葬した両親の供養を、いつの日か実現でききることを祈った。遠ざかる朝鮮……、さような

ら……、涙がいつまでも止まらなかった。

博多に上陸すると、崇福寺に収容された。係官に、氏名、生年月日を聞かれても、分からない子供が多く、帰るところも知らないのには驚かされた。興南から半年の間、寝食を共にした子供との別れは悲しく、途中別れた直ちゃん兄妹が帰国していないのが心配であった。

仏様に無事に帰国したことを感謝し、直ちゃん兄妹も早く帰りますようにと、弟と二人で祈った。

広島に帰る朝の孤児との別れはつらく、泣き出すマーちゃんの顔は、住職の袖の下に隠れてしまふ。幸ちゃん、裕ちゃん、俊坊、頑張っただね……元気でね……あの三十八度線を越えた子供たちだもの……涙を流しながら寺の門を出ようとしたとき、「あっ……直ちゃんだあ……」と、弟の声にびっくりした。寺の門を入ってくる兄妹は、まさしく直ちゃん兄妹だった。「心配してたのよ……、大丈夫？ お姉ちゃん広島に帰るから、何かあつ

たら手紙を頂戴ね」紙きれに住所を走り書きして手に渡した。

## 十二 広島での第一歩

昭和二十一年六月のある朝、広島駅に降り立った。一面の焼け野原を目の前にすると、呆然として声も出ない。爆心地より離れている祖母の家は無事だった。懐かしい格子戸を開ける。「お早うございます……、登美枝です……、只今帰りました！」叔母が走り出て来た。続いて祖母も。

乞食同然の姿に驚きながら、祖母は泣きながら抱きしめてくれた。姿もしくさも母にそっくりで……、それだけで言葉も出ない。仏壇に帰国を報告、持ち帰った過去帳を供えた。

半年の間、祖母の家に居候をした私も、髪の毛も少し伸び、女らしさも取り戻せたので、父の兄である伯父と同居して、昭和二十二年一月、中国電力㈱に入社した。昼は勤め、夜はミシン内職をする。米も配給であり、闇米を買う金もない私は、弁当には大根ごはん、塩味を付け、いり卵を

のせて、毎日変わらぬ弁当である。弟も育ち盛りでもあり、小作人の小母さんから届けられるサツマイモや大根は、大事な私たちの食糧であった。

海岸であさりなどの貝を掘って、弟はその貝を売って小遣いにしていた。月に一度は祖母の家に行き夕食を食べ、野菜やうどん、そうめんなどと背中のリュックに詰めてもらい、大喜びで帰ると、当分の間はさつま揚げや、肉も買うこともできた。貧しいながらも、弟と二人で食べられる幸せを感じ、飾ってある両親の遺影に手を合わせ、祈る毎日であった。

無理な内職がたたり、体調をくずして入院し、胆のう炎の手術をした。会社の方々の輸血や、叔父からの輸血などで一命はとりとめたが、今度は弟が脊椎カリエスで入院することになった。それは谷底に突き落とされるような大ショックであったが、しかし病気に負けるわけにもならず、弟の看病を続けた。

彼の消息もなく、心よりどこかを失いかけた

とき、孤児の直ちゃんからの手紙は、私の沈み勝ちな心を癒してくれた。そして直ちゃんの兄博充さんの手紙は、私を励ます力となった。

### 十三 結婚

弟のカリエスもコルセットをして通学できるようになった。博充さんは、陸軍幼年学校から陸軍士官学校へと順調に滑り出した人生だったが、終戦によりそれは頓挫した。戦後は定職に就けず、東京で日立造船の工員として働きながら夜間大学に通い、昭和二十五年国税庁採用の上級職試験に合格して、呉税務署に着任した。

呉に来た博充さんから結婚を申し込まれた私は、慶典で約束した彼のことを話した。ソ連からいまだに帰国していない彼の生死も分からず、五年待っても帰国しなければという返事をした。直ちゃんは、母方の叔父様の家に世話になり、みどりちゃんは、父方の伯父の家で育てられていた。しかし五年を過ぎても帰国しない彼を遠い思い出として封印し、博充さんの申し込みを承諾するこ

とにした。

昭和二十六年五月、両親の七回忌をすませて、祖母や叔父から嫁入り道具を揃えられて挙式した。義妹となったみどりと、弟俊雄との四人の生活が始まった。昭和二十七年には、直ちゃんの九大合格！ 角帽を被って来た姿に、涙が流れた。

天国の両親がどんなにか喜んでおられるかと思うと、我が子と同じようにして育てて頂いた叔父、叔母様に感謝した。そして頑張った直ちゃん……、よくやったね！ これからも荒波に負けないでよ！ 私もまた頑張ろうと思った。

夫の東京転勤……、弟の明大入学と、二十八年は多忙であった。みどりと二人きりの生活が始まり、また一生懸命に内職の洋裁に精を出した。

大学を卒業し、就職をした弟に、私たちも、責任を果たすことができ嬉しく思った。

十年勤めた会社を退職して上京、結婚して九年目、諦めていた子宝に恵まれて、昭和三十四年六月、待望の男の子誕生（通孝）と命名、義妹みど

りも高校生、色白なかわいい通孝をかわいがってくれた。三年後、二男（彰秀）誕生、「一人きりですよ」と医者に言われた私は、二男が生まれたときは、高年出産、嬉しかった。我が命を削っても育てようと思った。

二人の息子も元気に育ち、希望の早大、立教大を卒業、銀行に勤め、JTBに勤め、親から離れてしまう淋しさを感じながらも、長い年月を振り返り、病気もせず元気に成長した姿を見ると、私の両親にも見せたかったと思った。子供が小さいとき、友だちには「おじいちゃんやおばあちゃんがいるのに……」と自分たちにはいないのを不思議に思っていたが、戦争のため亡くなったと話すこと納得していた。

今は五人の孫に囲まれている私たち二人は定年退職後も現役で頑張っている夫に、心からご苦労様と言ってあげたいと思う。長男も私の心臓手術後、十五年勤めた銀行を退職し、早くから取得していた税理士を、夫と同じバッジをつけて活躍し

ている。

#### 十四 五十五年ぶりの北朝鮮

平成十二(二〇〇〇)年九月、北朝鮮會寧ツアーに参加した。五十五年ぶりに両親の供養の旅に出た。「内地に早く帰ろうよ」うわ言にまで言っていた母の声……、「きつと迎えに行くからね……」三十八度線で泣きながら約束した私は、命のあるうちに、供養ができたらと思いつけていただけに、この機会は逃されれないと思いい、「死んでも行くよ！」と息子や夫に言っていた。

夫と共に参加して、その願いがかなえられた。会寧の丘の慰霊祭……、異国の地に五十五年の長い間、待ち続けていた人たちに、日本から持参した酒、煙草に線香をたき、読経の流れる丘で祈り続けた。涙が流れ、声を出して泣いた。そして清津宿舍でも、中村家が住んでいた地で、供養ができた。残念なことに弟が私の心臓手術直前に、急性心不全で急死した。苦労を共にした弟の死はショックだったが、私の身代わりになったと思っ

ている。今は両親と天国から私たちを見守っていると思いい、どうぞ安らかに眠りくださいと、手を合わせて祈った。

遺骨のない墓に、清津の小石を拾って帰る。ツアー最終日、私の生まれた雄基の海、山、卵島、トラ山を眺めることができた。幼いころが思い出される。

父は、大正十(一九二一)年に二十八歳で実母のイサミと、当時一歳であった長姉を伴って渡鮮し、雄基で飾屋を営み、石炭販売、化粧品や玩具などを手広く商い、山林や、土地を持って繁盛したが、昭和五年に実母を結核で亡くし、その妹であったクニミと再婚した。私の次の妹は生まれて一年後に病死した。昭和七年四月に私は雄基公立尋常高等小学校に入学し、九年には弟の俊雄が生まれ幸福な日々を過ごしていたが、十二年の春に広島的女学校三年だった姉が、母と同じ結核で亡くなった。

失望した父は、二軒の店を人に貸して慶興に引

越し、阿吾地人造石油㈱に入社した。私は祖母の家から広島呉精華高等技芸女学校に通学していたが、十八年に両親の待つ慶興に戻った。慶興郵便局に勤め始めたが、朝鮮生まれの私は、平和を願いながら戦争に巻き込まれた青春となったのだ。

最終日、慶興峠にバスが着く。悠々と流れる豆満江、懐かしい水流峠、西峰台、五十六年ぶりの慶興、あの日のことを思い出す。小さな小石を一つ胸にしのばせた。

石丸巡査、その他多くの方のご冥福を祈り黙禱をする。

北朝鮮ツアーは、翌年もあり参加申し込みをしたが、出発前にみどりがくも膜下出血で急逝し、そのショックから私も心臓発作を起こし入院、義弟一人で両親の供養をした。

#### 十五 おわりに

平成十四年七月、彼との再会ができて、夫と二人で慶興の小石を届けた。「生きていてよかった

なあ」というが、優しい声も、誠実な目も変わってはいなかった。八十三歳の彼と、七十六歳の私、半世紀を隔てての再会は、私に新たな活力をもたらした。

戦争という激浪や、時代の大きなうねりに翻弄されながらも、私は懸命に生きてきた。その中で、愛してやまない多くの人を亡くした。そしてまた、愛くるしい生命いのちの誕生もあった。

喜寿を迎えた今、しみじみと思うのは、生命の尊さと、平和というもののありがたさである。そのことを孫たちや、またその子たちにぜひ感じ取ってもらいたいと思い、この手記を綴った。